



『 膵癌について（特に診断を中心に） 』

膵癌は胃癌や大腸癌などと比べても、発見時に外科手術の厳しい方が多い病気です。

膵癌の初発症状として、腹痛、黄疸、背部痛などがありますが、膵癌に特異的なものではありません。従って早期発見が大事となり、そのひとつに健診があります。健診での膵臓に関する検査は採血（特に血清アミラーゼ）と腹部超音波検査となります。

また最近では膵癌の危険因子が言われており、大きく「家族歴」「合併疾患」「嗜好」の3つがあります。

「家族歴」では、膵癌の家族歴のある人の膵癌リスクは1.6倍から3.4倍と言われています。また、「合併疾患」では、慢性膵炎や膵管内乳頭粘液性腫瘍、膵嚢胞が知られていますが、最近では糖尿病が注目をあびています。糖尿病における膵癌リスクは約2倍と言われ、膵癌の発症は糖尿病発症の1年から3年以内で最も高いようです。

「嗜好」では喫煙や大量飲酒が知られています。

これらに注意しながら検査所見を総合的に判断し、外科手術や抗癌剤治療、放射線治療、黄疸に対する減黄術などを行っていきます。



鹿児島厚生連病院
内視鏡センター科部長
谷 口 鎌 一 郎